

目的：慣用色名は、色みの伝達と共に人間の文化や歴史的なものまでイメージすることができる。その半面、色名による方法は、色みの色域があいまいになると言われる。しかし、生活に密着した色名の中には、男女の差なく精度の高い色名もある。また女性の方がやや多くの色名を認識し反応率も高い（本大会第41回、第42回）。そこで本報は、生活環境が慣用色名の認識に影響しているか、沖縄県の女子を対象に検討を試みた。

方法：沖縄県那覇市近郊に在住する女子（16-18歳）を対象に、質問紙により1990年12月、アンケート調査を実施した。調査における、呈示色、光源及び方法は、前回の調査と同様であるが、慣用色名を問う項目の色名は、JIS Z 8102より抽出した102語（83語が前調査と同一。色名の由来が植物に関するもの17語。JIS以外2語）と、生活環境の24項目について解答してもらった。慣用色名の項目は、単純集計で反応色域をみつけ、生活環境の項目では、因子分析（固有値1.0以上、バリマックス回転）を行い、基本的因子と因子得点を求め、慣用色名の認識との関連について考察した。

結果：慣用色名において、認識されている色名は71.5%（だいだい・藍色・朱色・濃あい…）、また認識があいまいな色名は16.7%（えび茶・古代紫・藍風・青竹色…）であった。認識されていない色名は、11.8%（ライラック・マルーン・ときわ色・オーキッド…）であった。生活環境では、10因子の基本的因子が抽出された。その累積寄与率は69.4%で、環境保護関心性、デザイン評価性、植物への関心性が強く、色名の認識には大きな影響を及ぼしていなかった。